

猿谷 日本に來られたのは初めてですか。

コガワ いいえ、二回目です。最初に來たのは十五年前です。そのときは約一か月ほど滞在し、帰ってからたくさん詩を書きました。これがそのときの詩をまとめた本(Choice of Dreams)です。もう絶版になってしまいましたが、第一章は日本に関するものです。

猿谷 今度はどういう目的でいらしたのですか。ルーツをたずねるとか、という目的があったのでしょうか。

コガワ とりたてて何の目的で、ということはないです。前もって滞在中の予定を立てるということもありませんでした。作家としてわたしは夢とか意識下の世界を扱うので、場所はあまり重要ではないです。わたしのいる場所は、家の中でも、バスでも、どこでもいいです。人生というのは一個の教師ですから、何をしようとするものが何がある、と思います。事実、来日してまだ何日もたっていないんですが、多くのことを学びましたし、いまでも学びつつあります。

猿谷 ところで、このObasanは詩のよいうで、イマジネーションがどこまでも広がっていく、という大変すばらしい本ですが、どういうきっかけで書きになったのですか。

コガワ 一九七七年にJericho Roadという詩集を出版したのですが、わたしはそれにちよつと不満でした。しかし次に何を書いたらいいのか、迷っていました。そのうち、ある日、アルバータ州コ

デーにある両親の家で寝ていたところ、オタワの公文書館へ行って、何か仕事をやれ——という夢を見たのです。わたしは夢のお告げに従うほうではないのですが、そのときはとにかくオタワに行ってみました。

その前に、わたしはある雑誌に記事を送ってあったのですが、その記事につける写真が必要だということで、公文書館へでかけました。そしてそこで誰かがミューリエル・キタガワの手紙を見せてくれたのです。それを読んだとたん、わたしはこれは小説にしなければならぬ、という衝動に駆られました。キタガワは、日系人としては珍らしく情熱的かつ強い女性で、手紙はバンクーバーに住んでいた弟宛てに書いたものでした。わたしは、その前にObasanという題の短編を書いてあったのですが、ミューリエルをエミリオおばさんにし、手紙を彼女が日本に帰った姉(ナオミの母)宛てに書き記した日記という設定にして、ふくらませました。

そのころのわたしは、たまたま日系人だというだけで、むしろそれとは関係なくただ一個の人間だと自らを考えていたわけですが、ミューリエルは日系カナダ人としての意識をもち、日系カナダ人としての強いアイデンティティをもっていました。社会的、政治的意識も強くもっていました。わたしにはそういうものはありませんでした。わたしは小説の中のナオミのような存在だったのです。それで個人的には、ミューリエルに強

く反発し、抵抗しました。しかし、二十四時間開いている公文書館で夜中、廊下を行ったり来たりしていると、ミューリエルがこれを書け、あれを書けとせつづくわけですね。彼女がかつて日系紙で、日系人の問題について一生懸命頑張ったときの情熱が、わたしにも伝わってくるのですね。

わたし自身は、もともと明治生まれの母に育てられた従順な女の子で、どちらかといえば小説の中のアヤおばさんに近かったのですが、Obasanを書いているうちにだんだんわたしの中にミューリエルの部分が大きくなったのです。かつてのわたしは非常にシャイで、人前ではろくに話もできませんでした。集会でも、隅っこに座って、ただ他人の意見を聞いているだけ。頭の中にいろいろな考えがあっても、それを口にできませんでした。しかし今では、自分のアイデンティティを裏切つて白人になろうとした自分がよく見えるようになり、日系カナダ人としていろいろ発言するようになりました。

Obasanを書くことによって、わたし自身が大きく変わりました。

猿谷 本の評判はとも良かったようですね。

コガワ ええ。わたし自身もびっくりするほど。賞もたくさんいただきましたし、書評もカナダだけでなく米国でも非常に好意的でした。カナダではベストセラーにもなりました。

Obasanは、カナダのいろいろな大学や高校あるいはサークルで、教材としても

使われているんですよ。講演などにもよく招かれますし、おかげでとても忙しくなりました。

猿谷 教材としては、どういう使われ方をするのでですか。

コガワ カナダ文学や英文学のテキストとして使われるのが多いのですが、レトリック・アンソロジーや歴史、社会学、女性学などの講座でも使用されているようです。

猿谷 なぜそんなに評判になったのでしょうか。

コガワ さあ、なぜでしょうね。わたしにもよく分かりませんが、ただ多くの人が、こんなことがあったなんて知らなかったと、ショックを受けたようです。歴史の本にも書いてありませんし。

猿谷 日系カナダ人をテーマにした小説は初めてですか。

コガワ 詩では書きましたし、先ほどお話したようにObasanという短編もあります。またともに扱ったのはこれが初めてです。わたしがものを書き始めたころ、日系人について書くなんて、思いもよりませんでした。まず売れる見込みがなかったのです。わたしに書けるとも思いませんでした。白人以外を扱った本を読んだことさえなかったのですから。わたしの最初の小説はAre There Any Shoes in Heaven?というのですが、これはパーキンスという白人家族の話なのです。この小説が掲載された雑誌の挿絵でみると、ノルウェー人の顔つきをして、髪はアロンドに描かれていました。

この家族は最初ブリティッシュ・コロンビア州の内陸部に住んでいて、あとでアルバータ州南部に引越すのですが、小さな子が寂しくなって元のところに帰りたいがります。これは実は日系カナダ人の物語なのですが、売るために、日系人の話を白人の物語に変えていたのです。

猿谷 話は変わりますが、今度、連邦議会の特別委員会が、議会に日系カナダ人への謝罪を勧告する報告書を提出しましたね。コガワさんは、政府が謝罪するとお考えですか。

コガワ そう思いますね。カナダ人の中には、カナダが白人だけの国ではなく、多民族国家であること、あるいは日系人が戦時中どういう扱いを受けたかということなど、知らない人がたくさんいます。しかし、公的には(日系人に対する扱いは)間違っていた、ということをとんとどの人が認めています。少なくとも謝罪はあると思います。理解が広まれば、補償もなされるでしょう。

猿谷 この問題についての日系カナダ人の動きはいかがですか。

コガワ 実際に活動しているのは非常に少ないですね。一般に、二世はできればあの惨めな時代について考えたくもない。一部の人たちが運動にかかわっているのですが、個人的な欲望や政治的な思惑があって、いろいろごたごたしているというのが現状です。子供のころ、びくびくしながら育つたということもあって、多くの二世はあまりことを荒立てたくな



「失われた祖國」 Obasan

「カナダの読者には
ショックだったようですね」



の著者ジョイ・コガワさんに聞く

東京女子大学教授 猿谷 要